



# あけぼの

第51号 2025. 3. 1  
宇和特別支援学校  
(知的障がい部門)  
図書館発行

なぜ読書が必要なのでしょう。私はこの質問にいくつかの答えを用意しています。今回はその一つを紹介したいと思います。

それは「人が他の動物と大きく異なる点は、言語機能によって知恵や技術などの後天的学習情報を社会的に蓄積・共有できることであり、文字の存在がその言語機能を更に高めている。」と思うからです。世の中のあらゆる物事は長い年月を掛けて培われてきました。一人の人間が一生の間にできることは本当に少ないものです。つまり、何代にもわたり受け継がれる中で物事は進歩してきました。それを可能にした立役者が本です。「先人から学ぶ」「歴史から学ぶ」という言葉があり、世の中には偉人と呼ばれて尊敬に値する生き方をした人たちが



校長 松本 淳

「本を読むことの意味とその大切さ」

います。皆さんも一人ぐらいは心当たりがあるでしょう。でも、なぜ知っているのですか。直接会ったことがあるのですか。そうではなく、伝記などを読むことで知ったのではないのでしょうか。我が家にも、野口英世、エジソン、ファースブル、ヘレン・ケラーなどの伝記があります。つまり、本がなければこの偉人たちの生き方や偉業を知ることがなかったのです。一冊の本に一人の人間の一生が詰まっているなんてすごいことだと思いませんか。何十年も掛けて経験し、成功や失敗を繰り返して学び続けたことが本として目の前にあるのです。私たちは、その偉人たちに、あるときは自分を重ね合わせ、あるときは第三者として傍観して、そこで悩みの解決策の糸口や進みたい将来の目標への道を見つけることもあれば、失敗しないように危険回避の方法を学ぶこともできるのです。

最近ではデジタル化により「本」のイメージも大きく変わってきました。電子ブックとしてスマートフォンやタブレットで読書をする人、紙の辞書ではなく電子辞書を使う人が増えてきました。あの小さな機器に紙の辞書の数十冊分のデータが詰まっています。これから技術が進めば、図書館のすべてをデジタル化し、そのデータを納めたハンディー機

器が登場することでしょう。まさに、図書館が手のひらに乗る時代になるのです。いずれ皆さんが思い描く紙の本は博物館でしか見られなくなるかもしれません。古い本の日焼けで黄ばんだ色や特有の匂いが、自分自身の懐かしい思い出を呼び起こしてくれていたもので、私にとってはとても残念なことです。しかし、どのような形であっても、本が多くのことを私たちに教えてくれ、私たちが成長させてくれることには変わりありません。人は本から学ぶことで進化し、多くのことを次世代に受け継いでいくのです。今、将来の夢に悩んでいる人、何をやるとうまくいかずに自信を失いかけている人は、本を読んで先人や歴史からアドバイスをもらい、それを力にして自らが将来への道を切り開いてください。そこに答えがあるはずですよ。だからこそ読書は大切なのです。



## 読書感想画



「となりのトトロ」

小学部四年月組  
片山 知希



「パンぶろぼう」

小学部四年月組児童



「おしりたんてい」

小学部五年月組  
小平 涼



「カレーライス」

小学部五年月組  
梶谷 泰輝



「だんごたべたい  
おつきさま」

小学部六年花組  
松浦 孝太



「じらねいたいしょう」

中学部一年A組  
清家 維麻



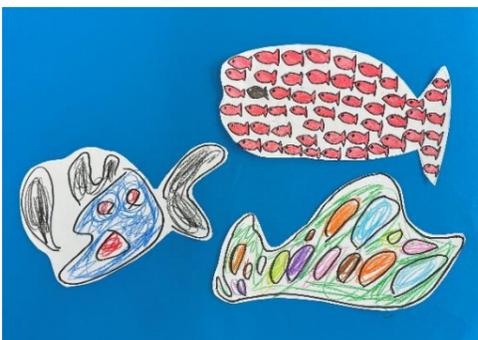
「金曜日はおさかな」

中学部一年C組  
野本 爽太



「大きな魚のふりをして」

中学部三年C組  
森本 晴大



「スイミーの世界」

中学部三年A組 上田 心  
中学部三年C組 窪田 優羅梨

# 読書感想文

## 「泣きたい私は猫をかぶる」を読んで

高等部一年G組 二宮 柚乃

私がこの本を選んだのは、本屋さんで見つけて、内容が気になって読んだのがきっかけです。

この物語は、中学二年生の主人公、笹本美代が本当の自分を見つける話です。美代は明るく元気な性格ですが、学校では男子に嫌がらせをされ、家には父親の婚約者があり、居場所が無いと感じていました。そんな美代には秘密があります。その秘密は、猫のお面をかぶると、白い猫に変身することができるのです。私がこの物語で好きなのは、内容が面白いところと、主人公の気持ちが伝わってくるからです。美代のつらい気持ちや悲しい気持ちも伝わってきて、涙が出てきてしまうところもあります。読み始めると、どんどん続きが気になり、気付いたら読み終わってしまいました。この本は、漢字が苦手な私もすらすらと読めるくらい読みやすい本です。私はこの本を読んで、美代はつらい思いを誰にも話すことができずにいたので、人に話すことは大切だなと思いました。



## 詩集「いきもののうた」を読んで

高等部二年F組 宮本 晃斗

「いきもののうた」という詩集の最初に小海永二の「いのち」という詩があります。この詩は命を大事なものとして表現しています。この詩には心に残る表現がいくつかあり、自分に命について考える機会となりました。

まず、花、虫、鳥、草たちにも命があるので、大切だから守るという気持ちが伝わってくる表現がありました。詩を読みながら、呼吸しているもの全てに命があることを強く感じました。

また、「互いに支えている」という表現が僕の心に響きました。互いに支え合い、いじめという概念がなくなれば、命を捨てることも無くなると思います。そうだったらいいと強く思います。

全部を読み終えて重要だと思ったのが、「見えない手を出し声を出し、互いに支えている」というところです。心を閉ざさないで、引きこもらず、声に出した方がいいと僕は感じています。僕は、小学生の時に、互いに伝え合うことができなくて、後悔した経験があります。でも、今は、悩みを伝え合える同級生や先輩がいます。みんなのおかげで後悔を乗り越えることができたので、とても感謝しています。悩みがあれば、今なら、先生や相談窓口で相談して心を開放できると思います。また、いじめを見たら、見て見ぬふりを

せずに立ち向かっていきたいです。

作者は、この世の中の秩序を正すためにこの詩を書いたのだと思います。しかし、残念ながら、いじめや差別によって消えてしまう命についてのニュースを見ることがあります。それは絶対にあってはならないことです。なぜなら、「いのち」は消えても、その人の思いは残り、苦しみや悲しみがなくなることはないように僕には思えるからです。だから、今ここに生きている命は、最も尊く、大切にしなければならぬものだと思えます。



## 「オランウータンに森を返す日」を読んで

高等部三年F組 山本 楓花

この本は、作家の川端裕人さんが実体験した話が元になっています。一九九九年、大阪のあるペットショップで、輸入することが国際的な取り決めで禁止されているオランウータン四頭が、密輸される事件が起きました。川端さんは、どうしてこんな事件が起きてしまったのかを知るために、北インドネシアのカリマンタン島に行きました。川端さんは実際にカリマンタン島に行き、事件の原因となるたくさんの問題を見つけました。

## 多読賞

本校では、「児童・生徒の読書意欲を高める」ことを目的として、毎年多読賞の表彰を行っています。一月末までに目標読書冊数に達した四名が表彰されます。

学年	氏名	冊数
小学部 (三十冊以上)		四名
五年月組	亀岡 敬太	三十冊
六年月組	竹内 柊亮	三十冊
六年花組	藤田 鳳介	三十冊
六年花組	松浦 孝太	三十冊

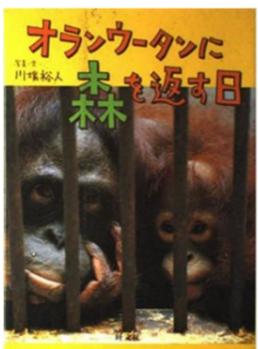
## 図書委員会の活動

本校の図書委員会は高等部一年生から三年生で活動しています。主な活動は、月に一回の図書委員会とお話会、週に一回の昼休みの貸出当番と図書の整理です。毎月のお話会では図書委員が絵本のページを分担し、読む練習をして本番に臨んでいます。お話会には、たくさんの児童・生徒が聞きに来てくれました。

僕は、図書委員になり、昼休みの当番やお話会を行いました。たくさんの人がお話を聞きに来てくれて、うれしかったです。

三年A組 有友 柁矢

私は家で猫を七匹飼っています。「かわいいなあ」と思って保護し、最初は一匹だったのが、七匹まで増えてしまいました。子猫の時はかわいいと思いきや、たくさん世話してあげました。でも、だんだん母に頼りつきりになってしまいました。この本を読み、これからは、人間にも動物にも優しくし、大切にできる人になりたいと思いました。



図書室に置いてあるリクエストボックスにたくさんのリクエストが届きます。今年度、リクエストに応じて、宇宙の図鑑や、「今日は何の日？」などたくさんのお本を購入しました。

